

奉賛会講演集 第三輯

御即位の礼と

大嘗祭

谷 省 吾

三重県護国神社奉賛会

三重県護国神社奉賛会主催
第三回公開講演会

御即位の礼と
大嘗祭

皇學館大學長 谷 省 吾

平成元年七月二十八日
於 三重県護国神社参集殿

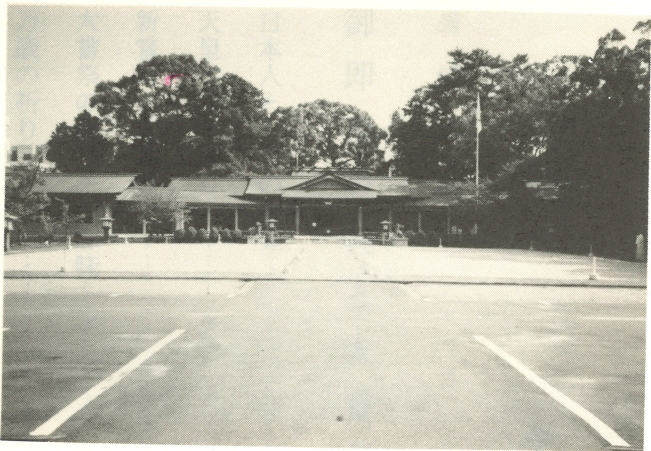
創立 三重県護国神社奉業
平賀武雄 三月二十八日

大嘗祭

時辰の外

三重県護国神社 谷 省吾

第三回公開奉業会
三重県護国神社奉業会主催



三重県護国神社沿革

明治二年津藩主藤堂高猷たかゆき公が、安濃郡八幡神社（現在津市）境内に小祠を建て、戊辰の役で戦死した藩士の霊を祀る『表忠社』が御創祀であり、以来国事国難に殉ぜられた三重県出身御英霊六万余柱の慰霊および安鎮と感謝の誠を捧げている。

明治七年官祭に列せられ、『官祭招魂社』となる。

同四十二年現在地（津市広明町）に移築遷座する。

昭和十四年、『三重県護国神社』と改称。

昭和天皇・皇太后両陛下には、同五十年十月二十七日行幸啓遊ばされ、御親拝を賜った。

平成元年に、御創祀百二十年・御遷座八十年・御社名改称五十年を迎えた。



一、新嘗祭の御様子と意味
 二、大嘗祭と大嘗祭
 三、万歳の祈り

目次

講師略歴

御即位の礼と大嘗祭

皇學館大學長 谷 省 吾

日本人としての自覚……………1頁

天皇・米・祭り……………12頁

新嘗祭と大嘗祭……………21頁

大嘗祭の御様子と意味……………26頁

万歳の祈り……………35頁



谷 省 吾 先 生 略 歴

大正10年9月21日生

本籍 大阪府

東京帝国大学文学部国史学科卒業

昭和37年より皇學館大學教授

同 63年より皇學館大學長に就任現在に至る

その他

神道史学会代表、神道宗教学会理事

神社本庁教学顧問など

主な著書

『神道原論』・『祭祀と思想』・『神を祭る』

『門松に祈る』・『真実の回復』・『神道と生活』

『神々の山』・『日本の琴線』・『石のひびき』

など

御即位の礼と大嘗祭

皇學館大學長 谷 省 吾

日本人としての自覚

国内の情勢が一挙に激動の時代に入り、皆様方におかれては、祖国日本の現在および将来について、いろいろと思ひめぐらされる事があるかと思ひます。また、それについてのお考えがおりになるかと思ひます。私共は、その考えを互いに率直に述べ合つて、激しく議論も交わしながら、この難しい情勢を心を込めて、また力を尽

くして克服してゆかなければなりません。その際に大事な事は、どんな時にでも最終的な国民としての結束、これを決して失つてはならない事だと思ひます。この結束を失う時、国は崩壊するのです。この結束を可能ならしめるのは、単に私共がこの国土に共に生活しているという事だけでなく、もっと深い何かが存在しているように、私は思ふのであります。

長い歴史によつて、築かれ伝えられてきた何か非常に深いものが、私共の結束を可能ならしめるのだと考えます。私共の日本という国、これは現在の日本国を構成している私達自身だけで成り立っているのではなく、私共の祖先、私共の子孫も、その構成員であることを、よく考えなければなりません。

もう何十年も前になりますが、私は、旧制高校の学生時代に、日本史の先生から講義を受けた、その最初の時間の最初の言葉に非常に感動しました。それによつて歴史

に目を開かされた気がしたのです。それはどういう事かといいますと、「社会は現在の構成員のみによって成立しているのではない」という事です。それまで私は歴史というものは、ただ単に昔の事を考えるものだと思っていましたが、実はそうではなくもっと深い意味がある。もっと真剣に考えなければならぬ問題が、そこには存在しているという事を知ったのです。祖先が築かれ、そして伝えられた、そういうものを受け継いでいかなければなりません。これを大事に守り、それを子孫に伝えてゆかなければならないのです。その伝えるものは、日本という国そのものであります。けれども日本という国を深く支え、この日本を日本たらしめているものが一体なんであるかをよく考えなければならぬのです。その大事な何か、それは、私共お互い共通の国民意識の基礎に、また生活の基盤に存しているものです。その大事なものの中の、しかも最も大事なものについて、今日は話をさせていただきます。

特に、本日は皆様方の前でこの話をさせていただくことにつきまして、私は何とも言いようがないという気持ちを持つのですが、それはこの大事なものをこそは、英霊の方々が命を賭けて護持せられたものそのものだったからです。

今から約百八十年前になりますが、当時のヨーロッパはナポレオンによって席卷されていきました。ドイツのベルリンもやはり例外でなく、ナポレオンの占領下になりました。その占領下のベルリンにおきまして、当時ドイツの代表的な哲学者フィヒテがベルリンのアカデミー、日本でいう学士院ですが、そのアカデミーにおいて指導者達の前で、一八〇七年十二月から一八〇八年の三月にかけて、十四回にわたって連続の講演を致しました。題して『ドイツ国民に告ぐ』。彼はその講演の中で、この屈辱的な時代に対して、我々は何とかそれを克服して立ち上がらなければならない。他人に頼るのではなく、ドイツ人自身の力で復興を成し遂げなければならない。その際に大事

なことは何であるか。我々自身の自覚である。何を自覚するのか。それは、彼の言葉によりますと、ドイツチハイトです。これはドイツ的な本性、あるいはドイツ的本質とでもいうべきものです。ドイツ人をドイツ的たらしめている本質的なものは何か。それをドイツチハイトというのであります。ドイツチハイトの自覚こそ、我々をこの時代から立ち上げらせるものである。これをお互いにしっかりと自覚しなければならぬと、力説したのであります。

最近の流行の言葉であります。アイデンティティという英語がよく使われております。アイデンティティにはいろいろな訳があります。同一性、本質など。要するに、そのものがそのものであるということが、アイデンティティであります。そして、日本及び日本人のアイデンティティなどと、よくいうのです。先程のドイツチハイトは、正にドイツ人のアイデンティティをいっているのでありましょう。このアイデンティティが

どのように形成されていくのかといえは、歴史によって形成され、伝承されていくのであり、それが私共の内に存在しているのであります。

ドイツ人フィヒテが、アイデンティティをドイツチハイトという言葉で表現し、その自覚が今一番大事だといったことは、現在の日本にとっても、考えなければならぬ大切なことと思われます。私共は、日本人のアイデンティティは何であるかということをしっかり考えて、それを自覚しなければならぬのではないのでしょうか。

現在は国際化の時代といわれておりまして、その言葉が流行であります。あちらこちらの大学などでも、国際化に対応するということで右往左往しています。なるほど日本人が視野を広くもって柔軟な考え方をし、外国のものをよく理解し、外国人と率直に交わることが必要です。今後の日本人にとって不可欠の問題であります。これまでの日本人は、そういう点に欠けるところが多かったのも事実です。しかし、その際

にやはり重要なことはアイデンティティの自覚です。それを自覚し保持していること
によって、尊敬と信用を獲得できるのです。そして、私共現在の日本人が、アイデン
ティティを自覚し保持することは、祖先に対して、また子孫に対しての責務であると
私は考えます。

今から一千三百年程前、当時の日本は奈良時代直前から初めにかけてですが、教科
書で皆さん御存じのとおり、律令国家の形成期であります。当時は、国内的にもいろ
いろ難しい問題がありました。対外的にも非常に難しい時代でありました。聖徳太子
の政治の御改革から始まって、大化の改新が実現し、更に引き続いて日本が国家体制
を整備する時代でした。その時代は、対外的にも非常に難しい時代でありました。当
時、百濟くだらと同盟関係にあった日本は、百濟を助けるために朝鮮に出兵しました。しか
し、天智天皇二年（六六三年）朝鮮の白村江はくすきのえで唐の水軍と海上で戦闘し、残念ながら

大敗したのであります。そういう対外的な問題を抱えながら、しかもその中で国家の
独立を確保していくために、私共の祖先は非常な苦勞をいたしました。それを指導さ
れたのが天智天皇であり、続いて天武天皇です。その天武天皇が、天武天皇十年（六
八一年）に律令の編纂を命令され、これが律令国家の基礎となるのであります。律令
によって国家体制が規定されるのであります。これを淨御原律令きよみはらのりょうといひます。そして
それが、天武天皇の大宝律令によって完成し、日本の律令体制が確立するのでありま
す。その後、若干の修正がありまして、養老律令ができます。

この律令というものを考えてみますと、当時の世界第一の大国で、文化の非常に高
い国であった唐の政治組織を学び、非常に沢山受け入れまして、規定の中ではそっく
りそのまま取ったものも多いのですが、それによって律令が作られています。しかし、
その当時の我々の先輩は、単に唐の制度をそのまま受け入れるのではなく、日本独自

の大事なものをしっかり守っていくために大変な配慮をしたようです。

一例を申しますと、当時の役所は二官八省といひまして、官と称する二つの役所と、省と称する八つの役所がありました。その八省を統括するのが、二官の一つの太政官だいじょうかんです。もう一つの官は神祇官じんぎかんです。神祇というのは天地の神々のことで、その神々のお祭りを司る役所です。実際の政治上では、八省を統轄する太政官が一番強い権力があり、神祇官は政治に直接タッチすることはありません。しかし、これを並べていう場合には、必ず第一に神祇官をいったのです。この並べ方ははっきり決められたものであり、変えることはできません。何故、百官の最初に神祇官が置かれているのかについて当時の解説をしたものを読んできると、神様の祭りというのは、国家にとっても天皇にとっても非常に大切なもので、他の役所とは意味が違っており、百官の最初にくるのであると説明しているのです。唐の朝廷でも祭りは非常に大事にしまして、

祭りに関することも日本よりはるかに細かく規定されているのでありますが、日本のように百官の最初に位置付けてはおりませんでした。そういうのが一例です。

何故そうなったのかというと、これが当時の日本人々の見識であったからです。では何故そのような見識があったのかといひますと、当時の人々の歴史の勉強というものからきているのです。それを考える手掛かりになることは、天武天皇が、天武天皇十年に律令の編纂を命ぜられ、その一ヶ月後の三月には、歴史の編纂を命ぜられたことでもあります。これは律令を考えるのに非常に大事なことであります。その歴史の編纂は、その後いろいろいきさつがありまして、やがて奈良時代の初期になり『日本書紀』として結実したのです。これが養老四年（七二〇年）のことです。もう一つ、それより八年程前の和銅五年（七一二年）に『古事記』が完成します。この『古事記』と『日本書紀』は、両方とも天武天皇の思し召しが元になって、いろいろな経緯の末

に出来上がってきたものです。律令時代の形成期に、二つの歴史が編纂されているということは、非常に大きな意義を持っているのです。こういう国家の大改革のときに、実は大化の改新の時もそうでしたし、聖徳太子の御政治の時もそうでしたが、日本の伝統を自覚することが、著しく前面に出てくることは素晴らしいことです。

これは明治維新の時もそうでした。明治維新は近代国家としての日本の出発点であるといわれておりますが、全くそのとおりです。しかしながら、同時に明治維新は、王政復古というものをスローガンとしてできたものです。日本の本来の姿に帰ろうというのが明治維新の指導者達の一致した考え方でした。それを実現すると同時に近代日本を国家として建設する、それによって、当時内外に直面していた危機を立派に克服したのです。

今日、非常に難しい時代に入ろうとしています。私共がお慕いしておりました昭和

天皇の崩御という事態に際会しまして、新しい時代が始まりましたが、私共は、今上天皇を仰いで一致結束して、この危機を切り抜けなければならない。その時に、私達は日本の日本たるゆえんをしっかりと認識しなければなりません。そしてそれを認識する大事なものを、今私達は目前にしているのです。それは即位の礼と大嘗祭であります。今日は特に大嘗祭についてお話をしてみたいです。

天皇、米、祭り

まず私は、日本のアイデンティティを理解するためのキーワードとして、三つのものを提示したいと思います。その一つは「天皇」であり、一つは「米」であり、もう一つは「祭り」であります。そして、この三つのキーワードを一つのものとして見る

ことができ、日本の本質を理解できるのが大嘗祭ではないかと思うのです。

まず「天皇」です。世界中に由緒ある君主国は数々ありまして、それぞれに君主の存在自体が国民の誇りとなっています。由緒ある国であればある程そうなのです。そしてそれが高い政治的安定性の基盤となっております。日本の天皇というお方も、その君主の中の一つということができましようが、それらと比較して際立った特色を持っておられると思います。それは日本という国が、この国土に住む人々が建設した最初の統一国家であり、その国家がすなわち現在の日本そのものにほかならないからです。しかも、その国家建設を指導されたのが、紛れもない今上天皇の御祖先、すなわち神武天皇であるということです。

建国以来二千数百年の歴史を顧みてみますと、決して穏やかな歴史ではございませんでした。その千辛万苦の中で天皇は、国の中心において高貴なる歴史を築いてゆか

れました。国難に際しては常に先頭にお立ちになり、また学問文化はいつも天皇の御指導によって、築かれ守られてきました。祖先は天皇をお護りすることによって、日本という国をずっと護持して伝承してきたのです。聖徳太子の日本国は、私共の日本そのものであり、『万葉集』の日本は、私共の日本そのものであり、芭蕉の日本は、私共の日本そのものです。明治天皇の日本は、私共の日本そのものです。そのことは非常に大事なことだと考えるのであります。そして革命を見ずに、一貫してきたことを象徴しているのが、天皇というお方であると考えるのであります。これが第一であります。

次に、「米」の問題です。この前の選挙でも、農業政策が争点になりました。争点というよりも、何かムード的なものが先行してしまいました。長年の農業政策に非常に問題があること、これはもう疑いのないことで、これから難しい問題として争点に

なることでしょう。心を尽くしてこの問題について考えなければなりません。私は農業問題の専門家として発言することは全くできませんけれども、大事と思えますのは農業の中心はやはり米だということです。しかも日本にとって米というものは、決して経済的な存在だけのものではない。我々の命を養う「ただそれだけのことでもありません。もちろんそうなのですけれども」もっと深く精神的なものと関わっている「ということを考えなければなりません。米を作るについて、我々の祖先が、先輩が、そして現在の農民の皆さんが、粒々^{りゅうりゅうしや}辛苦して米を作ったこと、このことの中に、深い精神性の問題があることを考えなければなりません」。

私は先年、会議がありまして、シンガポール・インドネシア・マレーシア方面を廻ってきました。その時に私が思いましたことは、なるほどアジアは一つだ、岡倉天心が明治時代にアジアは一つと言ったことは非常に有名ですが、天心の言った意味はと

もかくとして、確かにアジアが一つだと思いました。それは、シンガポールでもインドネシアでもマレーシアでも、全部米が主食であることです。ここに、インドネシアとシンガポールのコインを持ってまいりましたが、両方とも象徴的にデザインされているのは稲です。インドネシアの方は稲と綿です。そしてインドネシアに行きますと、日本と同じように神様を祭りながら米を作っています。

私は戦争中、外米とあって、東南アジアの米をよくいただき、このときも向こうで米をいただいできましたが、日本の米と向こうの米を比較してみますと、日本の米は本^{ほん}当に光り輝いていると私は思います。日本の米の持つ一粒一粒の輝きというものは、決して一朝一夕にできあがったものではありません。そこには長い歴史の間に、私達の祖先が神を祭りつつ、粒々辛苦して米を作ってきて下さいました。そのことによつて一粒一粒が、光り輝いているのだと私は思うのです。米というものは日本人にとつ

て大切なものであります。これを決してその場当たりの考えで処理してはならないのです。

私達は一年のことをトシといっているのですが、このトシという言葉の元は、穀物あるいは穀物の実りのことをトシといったのです。穀物、特に米を考えてみますと、春から秋にかけて栽培せられて、一年かけて作られるわけです。その一巡りの期間をトシといったのです。我々の生活の基準となっている暦は、実は米作りが基準となっていてきているのです。ここに妙な字を持ってまいりましたが、この上の方は漢字の古い字であります。それがこのように変わってくるのです。年という字です。日本語でいうとトシ、支那の言葉でいうとネンであります。向こうもやはり農業国ですが、この年という字の元は穀物の実りという意味であり、この字がそれを表しています。



この上の方は、穀物が実って穂が少し垂れている形で、下の部分はネンという音を表しています。それが真ん中の字になりました。これは、四季の季という字によく似ていますが、違います。向こうでも同じような経過があるわけです。日本でもそのようにトシという言葉で考えられています。米作りというものが、我々にとって非常に大切な意味を持っているのです。米を粗末にすると目がつぶれるなどということとは、昔からよく申しますけれども、これが日本人の心の伝承でございましょう。

もう一つ、「祭り」というものを挙げてみたいと思います。日本人は遠い昔から、こうして生きてゆけるのは、自分自身の力だけとは決して考えませんでした。米を作り米をいただくのでも、やはり神様の働きののおかげです。道具を作るのも、商売するのも、みな、神様のおかげをいただいてきたのです。私共の生きてゆく上で、なくてはならないもの、水・火、みなやはり神様のお働きをいただいているのです。水や火は有難いもので、これらなくして生活してゆくことはできません。しかし、一方では大変恐ろしいもので、水や火によって命が奪われるそういう恐ろしい働きさえ持っているのです。しかし、一方ではそれがなくては生きてゆけません。その基には神様のお働きがあるのです。そこで私達は、つし慎みかしこんで神様の御心に背かないように、神様を祭り祈りながら、水や火をいただき生活をしてきたのです。不思議な働き、有難い働き、そして尊い働き、そういうものに敬度けいけんに相対して、それから何かを期待し感謝し

祈る。その私達の気持ちを表すものが祭りなのです。

そうして、その祭りというものは、ただ一人一人が祭り祈るだけのものではありません。個々の祈りもありましょうが、日本人の祭りというものが、どのようにして祖先より伝えられてきたかという点、共同生活をしている人々が共に、神様をお祭りしてきたのです。共同生活の中心として祭りが存在してきました。氏神うぢがみといい、産土神うぶすながみといい、鎮守様といい、人々の血縁とか地縁とかを含む共同体の共同生活の核として、神様の祭りというものが存在し、伝えられてきたのです。どこの神社でも個人的に祭っているところはありませぬ。皆寄って、心を合せてその神社を祭ってきたのです。

日本人の生活および精神にとりまして、この祭りというものは非常に大切なものがあります。外国人が、日本の経済成長を大変驚いて、何故日本がそのようなことがで

きたかについて、いろいろ研究しますと、やはり行き着くところは神道あるいは祭りという問題だと言われております。以上に挙げました三つのもの、「天皇」・「米」・「祭り」これらを一つのものとして私達にお示し下さるのが大嘗祭なのです。大嘗祭は、天皇が天皇として天皇であるが故に、御自ら行われる米の祭りです。

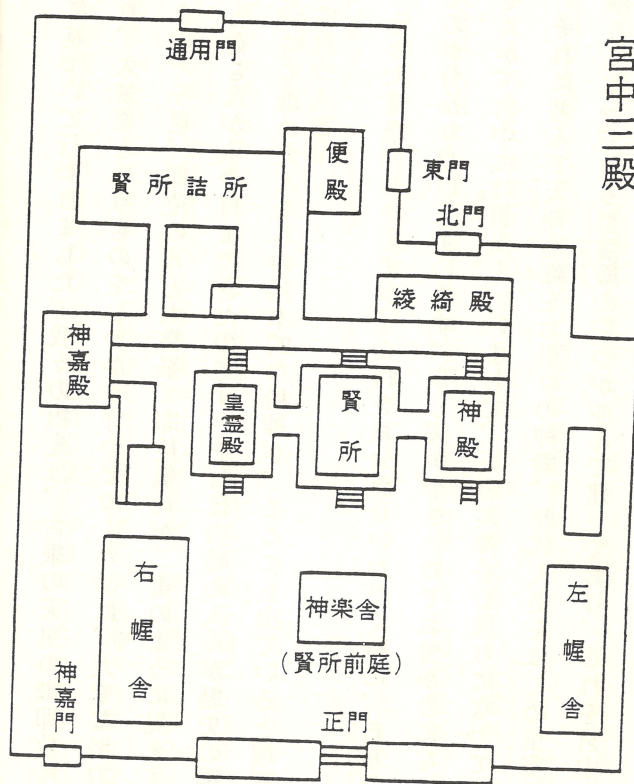
新嘗祭と大嘗祭

先帝陛下がお隠れになりました一年間、今上天皇は諒闇を過ごされます。それが明けますと、来年になっていよいよ御大典が行われます。御大典には即位の礼とともに、昔から大嘗祭が行われてきました。即位式・大嘗祭の形が整備されましたのは、律令国家形成の時代です。即位式の方は、支那の即位式が参考にされましたが、大嘗祭は

古い伝統に基づいて行われました。我々の祖先は、古来の天皇の御即位にあたっての大切な祭り、大嘗祭というものをしっかり守ってゆくために、大変な努力をしてきたのであります。一見、即位の式と大嘗祭、即位儀礼が二重のように見えますが、その形をずっと存しながら今日まできたのです。それは当時の人々が歴史の編纂と律令の編纂とを同時に進めたところの基本的な精神が、ここにも出ていると理解するものがあります。

さて、その大嘗祭であります。これをお分かりいただく時に、新嘗祭のことをお話しするのが分かり易いと思います。少し図が小さいのでお分かりになりにくいかもしれませんが、宮中には賢所といまして、天照大神をお祭りになっているところ、そして、それに並んで天神地祇をお祭りの神殿、歴代天皇をはじめ皇室の御祖先の方々をお祭りになっている皇霊殿の三つが並んで建っており、これを宮中三殿といいま

宮中三殿



す。宮中のお祭り、これを宮中祭祀さいしといいますが、宮中三殿において年中たくさんのお祭りがあります。その中には、陛下自らお出ましになって行われるお祭りも幾つかございますが、そういう数々あるお祭りの中でも、特に大事なお祭りの一つが新嘗祭であります。

十一月二十三日は勤労感謝の日とっておりますが、占領下に祝日が決まったことよって名前が今ようになったのであって、十一月二十三日が何故祝日になったかといえば、新嘗祭ということ以外に何もないのであります。勤労を感謝する日では決してありません。本来の意味は、陛下が宮中で新嘗祭を行われるその日なのです。

名前が変わることは大変なことで、名前が変わることによって本質が忘れ去られていきます。昔、孔子は「あなたが政治を任せられたらどういうことを最初にしますか？」と聞かれた時、「必ずや名を正たださんか。」といわれました。名を正すということ

は本当に大切なことです。

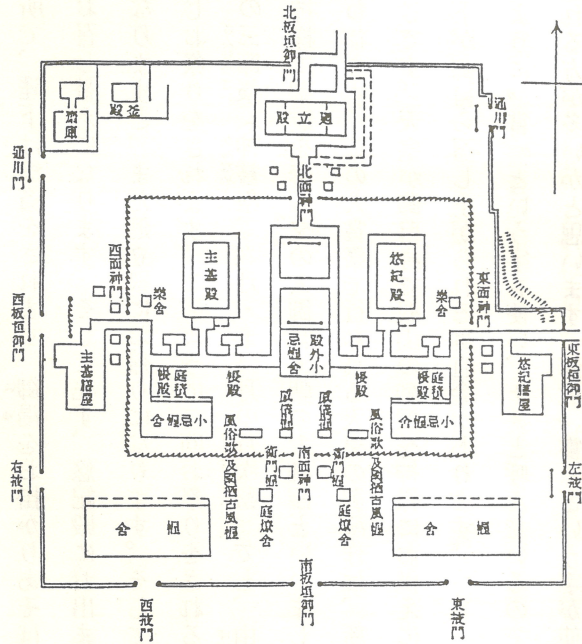
宮中の神嘉殿しんかでんにおいて、十一月二十三日に新嘗祭があるわけです。陛下は夕刻けつに潔齋さいをされて、綾綺殿りょうきでんというところでお召し替えをされます。齋服さいふくを召されて時刻に神嘉殿へ出られ、先ず夕ゆいの儀というのがあり、それがすみますと一旦綾綺殿に戻られます。そしてまたお出ましになられまして、暁あかつきの儀というお祭りをされます。そのお祭りの内容の細かいことにつきまして、ここでは憚りはまかもございましてので省略させていただきます。供えられます。そして御拝礼がありまして、御告文おつげぶみがあつて、御自身みみけが御饌みけを召し上がられる御所作ごしよさ、すなわち御直会おなむらいがあるのです。神様及び陛下が召し上がりになる御饌は、今年できあがつた新穀で調整された御饌みけでございまして、新米のお祭りというわけであります。

実は、そういうお祭りは全国でも沢山あります。米を作っている以上、新嘗の祭りは昔から各地で行われてきたのです。新嘗という言葉ではなくて、他の言葉で表されている場合もありますが、精神的には同じ新嘗の祭りが、各地で行われて参りました。全国の新嘗の祭りを、天皇が日本国の新嘗の祭りとして行われているのが、この新嘗祭であります。

大嘗祭の御様子と意味

天皇が新しく即位されました、最初にこの新嘗のお祭りをされますのを大嘗祭と申します。その時は神嘉殿ではなく、特別の御殿を臨時に設け、大規模にまた御丁重に行われるのであります。来年もそうでしょうが、大嘗祭というものは新嘗のお祭り

大嘗宮平面図



(『昭和大礼要録』による)

----- 柴垣
 ===== 板垣

ありますので、秋に行われます。先ず悠紀の田と主基の田を御指定になりまして、その田で一年かけて栽培され収穫された米で、御饌を調えられるのであります。

臨時に設けられます御齋場は、全体を大嘗宮と申しまして、南向きであります。その内に御殿が二つございまして、東の方を悠紀殿、西の方を主基殿と申します。悠紀・主基の意味に疑問を持たれるかもしれませんが、悠紀というのは、非常に清らかにして尊いもの神聖なものをいう場合に、悠紀という言葉が使われます。神宮のお祭りにも、由貴の大御饌というものがありますが、それと同じです。主基というのは次と"次"という意味であります。

神嘉殿で新嘗の祭りがあるわけですが、大嘗祭の場合も同じお祭りが二回あります。先ず悠紀殿で行い、ついで主基殿で行われます。そしてこれは全部夜のお祭りです。

廻立殿かいらいどうたんという所で、陛下は潔斎をされます。御湯みゆをお掛かりあそばされるのです。そうして齋服にお召し替えになります。そして先ず、悠紀殿にお出ましになられてお祭りがおすみになりますと、また廻立殿にお帰りになります。そして時刻になりますと、主基殿にて同じお祭りをされます。このように二回お祭りをされるのは、神宮でもそうです。神宮の三節祭さんせつさい(神嘗祭かんなめさい、六月・十二月の月次祭つきなみさい)でも、由貴ゆきの大御饌おおみけのお祭り、夜の間よのまに神様に御饌を奉る夕の大御嘗ゆうべ・朝の大御饌あしたといひまして、やはり二回同じお祭りが行われます。この大嘗祭で行われる天皇の御所作は、新嘗祭で行われるのとほとんど同じです。天皇が御自身で沢山の御饌を神様にお供えになります。それから最後に、陛下が御自ら召し上がられる御直会があります。

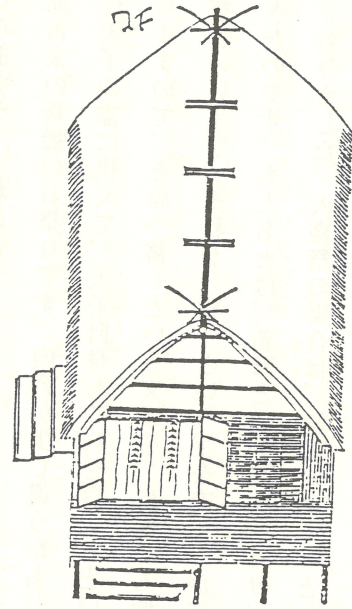
新嘗というように「嘗」という字を使い、ナメと呼んでいるので、天皇はなめられるのかと思われる方が多いかと思えます。何故「嘗」という字が使われているのかと

いうことを考えてみますと、これは古く支那に「嘗」という祭りがあったからです。これはやはり支那古来の新穀のお祭りです。内容が少し違うかもしれませんが、新穀を寝廟しんびやうという歴代天子の霊に供えて、天子自身もこれを食するという祭りです。形態が非常に似ておりますので、その「嘗」という文字を、日本でも使ったのです。そして大嘗祭・新嘗祭といひます。それを「嘗」という字を充てたがゆえに「ニイナメ」という言葉ができたのです。もともとは、新嘗と書いてもニイナメとは読みませんが、ニイナエといっておりました。大嘗祭の場合は、結局オオナエという言葉はおこらずオオニエであります。神嘗祭の場合も恐らく、カンニエなどというのが本来の言い方でありましょう。ニイナエというのはニイノアエ、ニイというのは新穀のことであり、アエというのは食物を作ってもてなすという意味であり。新穀で調えられた御饌を奉るのがニイナエであります。オオニエと申しますと、神様や天皇に食事を奉ること、

あるいは奉るものそのものをいうのです。

大嘗祭では、臨時に御殿を新しく二つ造ります。臨時の御殿ですから、非常に素朴なおしつらえであり、柱などは黒木くろぎと申しまして黒い皮付きの柱を使います。臨時の

大嘗宮 図



(荷田在満『大嘗会便蒙』より)

御殿では黒木を使い、そしてお祭りがすむと、これを壊してしまうのが昔からの例であります。

少し整理して申しますと、現在、毎年行われているお祭りに新嘗祭があります。天皇が新穀のお祭りをされているわけですが、それに先立って天皇は、神宮の神嘗祭を行わしめられます。神宮に対して九月に神嘗祭を行わしめられ、神宮に新穀を奉り、そして翌々月の十一月二十三日に、陛下御自身で、宮中に於て新穀のお祭りをされるのです。そして、天皇が天皇におなりになった時、最初になさるのが大嘗祭であります。

お祭りの御様子についてはそのようなことですが、『日本書紀』に、この祭りの意味を考えさせられる大事な伝承（神話）が伝わっています。それはどういうことかといえますと、いわゆる天孫降臨てんそんこうりん、天照大神あまてらすおおかみのお孫様が地上に降りてこられます。その

お方が天皇の御先祖であられます。この話は、『日本書紀』にも『古事記』にも伝わっておりませんが、特に『日本書紀』にはいろいろな形で伝わっております。その一つ（天孫降臨章の第二の一書）に、お降りになる時、天照大神が稲の穂を授けて仰せがあったとあります。これを「齋庭の稲穂の神勅」と申しておりますが、どういふ仰せであったかと申しますと、「吾が高天の原にきこしめす齋庭の穂を以ちて、また吾が児にまかせまつるべし」。意味は、自分が高天の原（天上）において食している稲の穂を、そなたに託すからそれを持って地上に降りるように。稲の穂というものは人々の命の基になるのであります。それを持って降りるようにと仰せでありました。その稲穂と仰せをいだかれて、天孫は御降臨になりました。「吾が児」とありますように、はじめお子様の天忍穗耳尊に授けられたのであります。天忍穗耳尊に瓊瓊杵尊というお子様がおできになったので、結局、お孫様の瓊瓊杵尊が稲穂をい

ただかれて、お降りになったのです。

その天孫の御子孫、いわゆる天つ日嗣の天つ高御座にお即きになる天皇、このお方が御位にお即きになると、先ず新しい一年をかけ米作りを看そなわしまして、それが収穫されると、その新米をもって神様をお祭りになる。そして、御自らもそれを召し上がります。これが大嘗祭です。そして次の年からは、毎年新嘗祭を繰り返されるのです。

このお姿は、天照大神の仰せのままに、天下にのぞまれる天皇のお姿そのものであります。と申すべきであります。即ち、新米のお祭りを行わせたもうことは、天皇の天皇たるゆえんを、身をもって御確認になるといえるのであります。それが毎年繰り返されるのです。それが天皇のお姿で、もっとも本質的で大事なお姿がそこにあります。そして、そのお姿を初めて陛下御自身で御確認になり、また、私共国民が仰ぐことが

できるのは、御即位の時に行われる大嘗祭であると考えられます。このお祭りにつきました、宗教学的ないろいろな解釈が行われております。それはそれで結構なことですが、大事なことは、今申しましたような基本的なことをしっかり確認することにあります。

万歳の祈り

来年の秋、大嘗祭が厳かに、めでたく齋行さいこうされることになりました。また、そうでなければなりません。世の中がどのように変わろうとも、政治情勢がどうなるうとも、これだけは何としても立派に行っていただかなければなりません。また、そのように行ってもらえるような情勢を、私達が力を尽くして維持してゆくように努力をし

ていかなければなりません。そして、大嘗祭を仰ぎながら、心をこめて大御代の万歳を祈りたいと思います。その大御代の万歳、これこそが、日本の祈りの最も凝縮し窮極するところであり、それが英霊の祈り給うことであるとも思うのです。

新嘗祭がおすみになりますと、陛下が御殿からお下がりになります。その時に歌われる神楽歌かぐらうたがあります。実は、お祭りの間中、神楽歌というものが演奏されているのですが、陛下がお下がりになる時の神楽歌、これは「千歳せんざい」という歌で、大昔から歌い継がれているものです。

千歳せんざい 千歳 千歳や千歳や 千年ちとせの千歳や

万歳まんざい 万歳 万歳や万歳や 万代よろずよの万歳や

なほ千歳

なほ万歳

千歳 千歳 千歳や千歳や 千年の千歳や
万歳 万歳 万歳や万歳や 万代の万歳や

このように誠に単純な歌であります。日本の祈りといったものがこの歌にはっきりと表れています。どういう時にこの歌が歌われているかによって、この歌の持っている意味が、本当にしみじみと胸に迫るところがあります。

実は、大嘗祭につきましたは、もっとお話をしなければならぬことが沢山ありますが、いろいろお話してもかえって煩雑はんざつですし、また時間も余りございませんので、このへんで終わらせていただきます。

始めに申しましたように、今日のような激動の時代にこそ、私達は日本の日本たるゆえんのものをしっかり確認して励まなければなりません。私達はお互いに微力ではありますが、心を合わせ、大事なものを守るために努力をさせていただいたら本当に

(拍手)

ありがたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

奉賛会講演集 第三輯

平成二年四月一日発行

発行者 三重県護国神社奉賛会

〒514 津市広明町三八七番地
三重県護国神社内